

原点に立ちかえって考え直すこと (6)

— 人間学的観点からのまとめ —

矢谷 慈 國 (雲谷 齋)

Rethinking on Human Life, Tracing Back to the Original Way of Life (6)

— Theoretical Over View from Humanics —

Yoshikuni YATANI (Unkokusai)

要 約

今回の原稿で、「原点に立ちかえって考え直すこと」(1～6)のシリーズを終える。本稿ではこのシリーズの(1～5)までに報告と考察を行ってきたキャンプ経験を取り扱う上での、私自身の理論的枠組と、その展開を第一章から第三章において述べる。

第四章においては、追手門学院大学社会学科で20回にわたって実践してきた「私のキャンプ実習」が、多元的リアリティの独自の一領域であることを示す。そしてそれが私の考えてきた「U.P.」の体験を学生たちに、それぞれのし方で獲得してもらうための試みであること、を述べる。このまとめを書くことで、私は70才の停年になるまで、分尾キャンプに学生たちを招待し続ける覚悟を決めたのである。

キーワード：ブルカニロ図, 秩序の弁証法的包摂関係, U.P., sign と symbol, 近代社会の疎外, ルーティン化, 部分的自己, Total Self, 多元的リアリティの一つとしてのキャンプ実習

序

これまで「原点に立ちかえって考え直すこと」というタイトルのもとに、5回にわたって、「私自身の自然との関わり、キャンプ経験の自分史(1)」からスタートして、追手門学院大学社会科学科におけるキャンプ実習の報告と考察(2~5)を展開してきた¹⁾。

このシリーズをしめくくるにあたって、それらの活動の前提ともなり、それらの実践によって、「弁証法的身体の現象学の立場」という形で、私自身の体験と思索の中で深化され、独自に展開されてきた、理論的構成の現時点でのまとめを行うのが本稿の目的である。

第一章においては、30年にわたるキャンプ実習や食と農の基礎教育をめざすフィールド・ワークの授業などの実践と、現象学的生活世界論、多元的リアリティ論の理論的考察を行う中で形成され展開されてきた「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典(案)」の図についての説明を行う。この図は1993年1月6日に作成されて以来²⁾、何度も手直しされたり、追記されてきたものであり、今回の改訂の主な点は、「秩序の相転移」の諸階段が書き加えられたことである。

第二章においては、「ブルカニロ図」と共に作成され、いつも同時に掲載されてきたが、これまで一度も詳細な説明がなされなかった、「秩序の弁証法的包摂関係(案)——メルロ・ポンティ『行動の構造』より——」について、今回初めて論述する。量子重力論が宇宙の発生以前の状態として仮定している「無あるいは真空の秩序」と枢軸時代のカリスマたちの教説の中で展開されている「無、空、無我、無知の知、無依自然、無からの天地の創造」などとの思考構造の類似性については、一部別稿において言及しておいた³⁾。「二つの秩序の入れ子構造の図」のうち、A.「無の秩序からみた文化の秩序」は、量子重力論の立場を示し、B.「文化の視点から気づかれた無の秩序」は、カリスマたちのリファインされたユニバーサル・プロジェクション(U.P.)の立場を示している

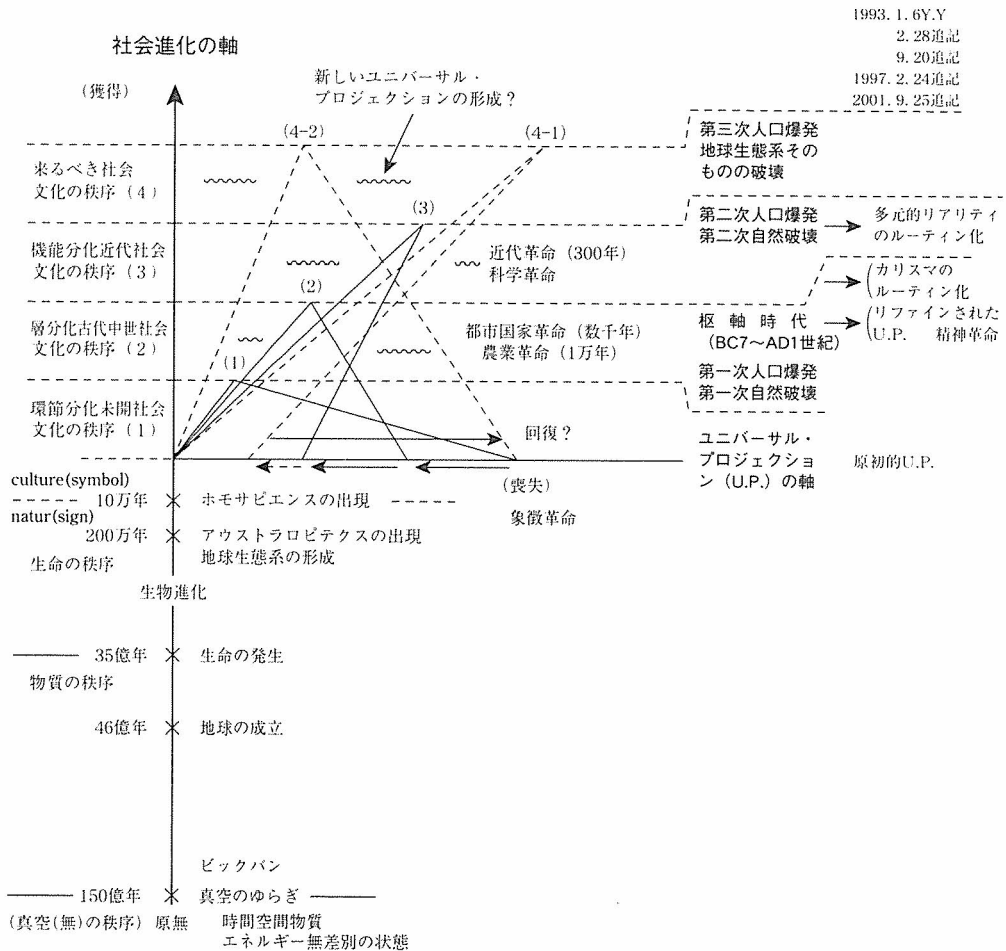
第三章においては、生命の秩序の一部、動物の一種属である人類が、他の生命がもたない文化を作り出し発展させるに至る上での情報処理上の秩序の質的变化を、nature(sign)からCulture(Symbol)への変化として整理し、その基本的問題点について論述する。そこでは、人間以外の生物たちが、それぞれの種に固有の遺伝子プログラムによって進化し、sign作用という情報処理のし方で、生命たちの相互作用、相互活動を行うことによって、地球生態系が形成されてきたこと。それに対して人類のみが、外部化された文化プログラム(Symbol作用という情報処理の形式)を発達させたことによって、文化や大文明を加速的に展開し、第一次から第三次に至る人口爆発と自然破壊を行い、21世紀には、地球生態系そのものを破壊するに至っていることの原理的考察が行われる。

第四章においては、私がフッサールとシュツツの問題提起から学びつつ、独自に展開してきた「生活世界と多元的リアリティの理論」の概要を、それを整理するために作成した図によって示

し、それが「人間主体によって生きられている経験の構造の解明」に有効に用いることを、本シリーズのテーマである「キャンプ経験」の分析に適用することによって明らかなものとした。

第一章 原点に立ちかえって考え直すための図としての「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典(案) 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』より」(第I図)について

第I図は、1993年以来、何度も追記、改訂をくりかえしてきている私の思考の大枠となっている図である。タテ軸は150億年前に起ったとされる、真空(無)の秩序のゆらぎ(相転移)による宇宙の生成から地球の成立(物質の秩序)、生命の発生と進化(生命の秩序)、人類(ホモ・



第I図 ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典(案) 宮沢賢治、『銀河鉄道の夜』より

サピエンス)という生物の一種属でありながら、象徴を操る能力の獲得によって文化プログラムを作り出すに至った生きものの出現(文化の秩序)、文化プログラムの加速的な変化によって、人類がわずか1万年程の間に、環節分化的未開社会から層分化的な古代、中世社会を経て、機能分化的近代社会を作り出し、自らを生み出し生かし続けてくれた地球生態系そのものの破壊にまで至る社会進化の過程(文化の秩序1~4)を一つの時間軸で示しているものである。

ヨコ軸はユニバーサル・プロジェクション(以下略してU.P.と表記)の軸である。U.P.とは「人間と自然、個人と社会(共同体)、精神(主観)と身体(客観)の間を二元論的に実体化して分割するのではなく、それらを一体連続としてとらえる体験様式、思考様式」と定義される。

約10万年前にホモ・サピエンスは地球上に出現したが、人類の歴史は宇宙や地球や生命の歴史が150億年であることに比すと、ごく最近の出来事にすぎない。直立歩行する原人(アウストラロピテクス)からホモ・サピエンスに至る進化には約200万年の年月を要している。図では、これまでの人類社会の変化を社会的分化や分業の型を基準として、三段階の底辺と高さの異なる三角形で描き、来るべき社会の可能な二つの極相を点線で描いた三角形4-1と三角形4-2の形で表現している。

ホモ・サピエンスの出現から上と、宇宙の成立へもどる下が同じ程度の長さの線で表現されているが、実際の時間縮尺に直すと、下の線は上の線の15億倍の長さに描かねばならないのである。

三角形(1)(2)(3)のそれぞれの底辺はU.P.を表現しているが、社会進化の軸での獲得(通常社会の進化や進歩と考えられている、人類が自然や社会を支配するより大きな力の獲得)は、同時にU.P.の軸における喪失を意味している。一方でのゲインは地方でのロスを不可避に伴うということが人間の為すわざの普遍的な問題点なのである。したがってこの図は、単純な直線的進化論とは異なった考え方、象徴を操るに至った人間の存在自体が内在させている、原罪や業を見ずえる人間洞察に基づいて描かれていることに注意していただきたい。

それゆえ、機能分化的近代社会(三角形3)は力の獲得と進化という観点からは、それ以前の社会よりもより高い進歩した社会であるが、U.P.の喪失が最も進み、U.P.の体験において最も貧しくなった社会であることになる。約300年前から西欧で始まり、我々が現在も経験しつつある近代社会というシステムは、人間と自然、個人と社会、精神と身体の間での二元分割と、それぞれの前者が後者を支配するあり方が、人類史上最も極端になりつつある社会なのである。

人類の社会進化の三つの階段と、それぞれへと至る変化の画期となった出来事を列挙すると以下のようなになる。

約1万年前の農業革命と牧畜革命(食糧革命)と数千年前の都市国家革命(四大河川文明の成立)、その結果としての第一次自然破壊と人口爆発。

その問題を解決すべき精神革命の原理を「それぞれのリファインされたU.P.」の教説として説いた、宗教的、哲学的カリスマたちが同時多発的に世界史に出現する枢軸時代(BC7世紀~AD1世紀)。

カリスマたちの教説を制度化、体制化、国教化、ルーティン化することによって成立した層分化的古代中世社会 (BC 7 世紀～AD 17 世紀)。

約 300 年前から科学革命、資本主義革命、産業革命、市民革命、国民国家の成立などの特殊西欧的ワンセットの近代革命を成し遂げて成立したのが、機能分化的近代社会である。その結果として、ヨーロッパには 19 世紀に第二次自然破壊と第二次人口爆発が起った。しかしそれらは、西欧諸国が非西欧世界を分割植民化することや、製鉄を木炭からコークスの使用で行うなどの技術革新によって乗り越えられた。と共に西欧諸国民国家間の帝国主義的覇権争奪戦争が続いた。日本は非西欧世界の中で 1868 年から、西欧に約 200 年間遅れながらも唯一自前で近代化を促進することになった。日本は近代化を自前で促進することによって西欧列強に伍して、帝国主義的植民地獲得競争に参加する国となった。19 世紀から 20 世紀前半は、まさに戦争の世紀であった。

第二次世界大戦の終結後、アジア、アフリカ諸国が続々と西欧の植民地から独立を果し、それぞれのモデルでの近代化を推進することとなった。1945 年から 90 年初頭のソ連邦解体までは、近代化の二つのモデルとしての資本主義陣営と社会主義陣営とが、東西対立、冷戦構造を作り出していた。と共に、近代化の早く進んだ豊かな北の国々と近代化が始まったばかりの貧しい南の国々との間の、南北格差問題が顕在化してきた。

1990 年以降は、東西冷戦体消は解消されたが、冷戦体制下の一党独裁の社会主義国家という強力なタガを外れると、それによって抑えつけられて表面化しなかった、より古い歴史に根ざす民族、宗教の対立が顕在化し、激化しはじめた。このような世界全体にわたる資本主義化、グローバル化の動きは、21 世紀前半には、第三次人口爆発と、地球生態系そのものの破壊に至る危機を生み出しつつある。

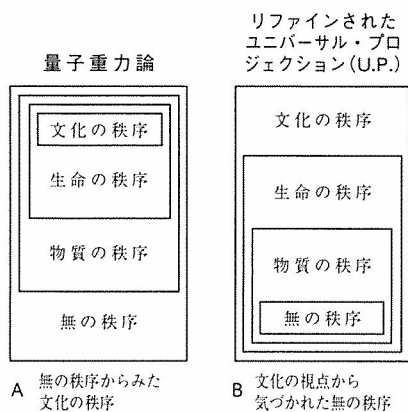
これらの詳細については別稿⁴⁾で論述しているので参照されたい。

第二章 秩序の相転移という秩序の原点の考察、「秩序の弁証法的包摂関係 (案)メルロ・ポンティ『行動の構造』より」(第Ⅱ図)について

第Ⅱ図「秩序の弁証法的包摂関係 (案)」という図は、メルロ・ポンティの『行動の構造⁵⁾』の中であげられていた、物質の秩序、生命の秩序、人間の秩序の、三つの秩序の層位関係と弁証法的な包摂関係の考え方を発想の出発点としている。その考え方によれば、「上位の秩序がより下位の秩序を弁証法的に統合することによって、上位の秩序が維持されること。上位の秩序が破壊されるとより下位の秩序へ還帰あるいは退行すること。」が基本的な構造を作っている。

第Ⅱ図はこのようなメルロ・ポンティの考えに、量子重力論が宇宙の発生以前に仮定している「無あるいは真空の秩序」を加えることによって、四層の秩序の弁証法的包摂関係として作図したものである。

同じような入れ子構造の図が A と B の二つの形で描かれている。A は「量子重力論」の立場



メルロ・ポンティ『行動の構造』より
第Ⅱ図 秩序の弁証法的包摂関係(案)

に立った、無の秩序からみた文化の秩序を示している。

B図は、枢軸時代のカリスマたちの「リファインされたU.P.の立場」から気づかれ言表された、空あるいは無の秩序を示している。

A図においては、ブルカニロ図で示したような、時間的序列に従って、秩序の相転移(ゆらぎ)によって、すべてを含んでいるが、時間空間物質エネルギーの区別のない状態と定義される、原初の無の秩序から、150億年前に、時間空間物質エネルギーの区別のある状態である宇宙が成立し、膨張を続けた。銀河が生まれ太陽系が成立し、46億年前に地球が誕生した。そのプロセスはすべて、因果論ある

いは機械論的構造をもつ物理化学的な物質の秩序の中の出来事である。

次に、物質の秩序の一部である地球上に35億年前に生命が発生すると、そこには物質の秩序の一部ではあるが、より上位の目的論的構造を持つ新しい生命の秩序が誕生したことになる。35億年にわたる長い生物進化のプロセスは、すべて遺伝子プログラムによって個体保存と種の保存のための目的行動が決定される、生命の秩序の中での変化であると言える。

しかし、生命の秩序の中から象徴を操る能力の獲得によって可能となった、文化プログラムによって、その生存の意味づけを自ら行い、生活のあらゆる行為様式を決めていく、新しい秩序としての、人間の文化の秩序が、ホモ・サピエンスを基準にとれば、約10万年程前に成立したのである。

A図は秩序の相転移の時間的先後の序列と、より下位の秩序が上位の秩序の土台、支持者となっていることを示している。そしてより上位の秩序は下位の秩序を、自らの水準で弁証法的に統合することによってのみ、均衡を保持しているのである。

しかし人間の文化秩序、精神活動の秩序は、例えば事故による脳損傷や強度のアルコール酩酊などの状況では、より下位の動物的状态あるいはさらに下位の植物的状態へと退行するし、生命としての死を迎えるとさらに下位の物質の秩序に還帰する。人間が高度な精神的統一を保持したり、思考活動を行いうるということは、人間の精神的秩序の水準において、人間を構成しているより下位の生命の秩序や物質の秩序が、弁証法的に統合されているからなのである。逆に言うと、量子重力論の観点からは、その物質の秩序の下位にあって、物質の成立そのものを支えている秩序は宇宙の成立以前の無あるいは真空の秩序であるということになる。

B図では、A図のちょうど逆に秩序の弁証法的包摂関係が図示されている。この図で描こうとしているのは、常識的立場でも量子重力論の立場でもなく人間や世界の存在の根拠を「エゴコギ

トや欲望の中心としての日常的な人間的エゴ」から自由になって、「無差別、無分別、無所得、無知、無我、無欲、無心、無功德、無からの天地の創造など」に見出して行った、「枢軸時代のカリスマたちの立場から気づかれ言表された無や空の秩序⁶⁾」なのである。量子重力論というような20世紀が作り出した高度に発達した、近代物理学の知識などと全く無縁に、カリスマたちは「無や空の発見」をしていた。第一次人口爆発と自然破壊をはじめとする、人間と自然、個人と社会、精神と身体の二元分割を生み、古代都市国家文明を生み出してしまった人間の文化秩序が、他の生きものたちには見ることでできない、墮落や疎外を示していることを彼らは見極め、そのような人間の原罪や業を乗り越える道を模索していたのである。そのような根源的な問題は、彼らが人間精神の活動の最高の高みと、最深の深みの中でとらえた、空や無の立場に立たない限り根本的な解決に至り得ないことを看破し、言表し、生きたふるまいの中でそれを示したのである。そしてそのような人間として希有なあり方は、だれでも、「目覚めさえすれば、気づきさえすれば悔い改めて神の定めに戻りさえすれば、」即座に可能になることを伝えようとしたのである。

量子重力論の無や真空と、カリスマたちのそれとは、勿論同じものではない。しかし、量子重力論の無や真空の概念とカリスマたちが言表したそれとの間に、構造的類似性を見出したり、そこから示唆を受けたりしている現代物理学者⁷⁾もいるのである。

私は社会学の観点から、これらのカリスマたちが言表したことがらの共通項を「リファインされた U.P.」の表明と名づけている。それは人間が象徴を操作し、文化や文明を作りあげ、それを人間的エゴの拡大の方向へと加速的に変化させてきた結果、ますます露わとなってきた、「人間と自然、個人と社会、精神と身体の間二元分割」という問題を克服する教説であり、それらの二元分割を乗り越えて、それらの間に一体性と連続性を回復する統合された人間としての生き方、存在のし方の表明なのである。

人類が長い歴史の中で作りあげてきた U.P. の種々相に関して私は、①原初的 U.P. としての未開社会のアニミズムやトーテミズムや呪術や神活体系、②原初的 U.P. のもう一つの形態としての子供の思考、体験様式の中に見出せる U.P.、③枢軸時代のカリスマたちによって言表された「リファインされた U.P.」④古代中世社会における、カリスマのルーティン化によって成立した、体制化された U.P.、⑤近代社会における、科学と日常生活の現実以外の多元的リアリティ（遊び、スポーツ、ファンタジー、旅、芸術、宗教など）の中に見出しうる U.P. と、近代社会における多元的リアリティのルーティン化の現象を区別しておいた⁸⁾。キャンプ経験の中で体験される U.P. はこの⑤のカテゴリーの中に入るものである。

近代社会は、U.P. 体験のますますの減少（Loss）と、科学技術と結びついた資本主義経済のグローバル化によって、人間のエゴ中心的な豊かさ、便利さ、快適さ、長生き、福祉の増大を追求する欲望達成の最大化（Gain）によって特徴づけられる社会である。この近代社会の原理にもとづく経済成長の展開は、21世紀の中ばにおいては、大気の温暖化や森林破壊や環境汚染などによる、地球生態系の破壊（第三次の地球全体にわたる自然破壊）と、南の国々の人

口爆発による、食糧、資源、エネルギーの地球規模での不足と、それらの獲得をめぐる北と南の紛争によって、破綻せざるを得ないことが、あらゆる統計データによって予測されている⁹⁾。それはブルカニロ図における「三角形4-1」の方向に向うことである。

人類がこの問題を克服しうる可能性は、カリスマたちの言表した古いU.P.の回復と、新しいU.P.の形成によって、資本主義経済の合理性を乗り越えるエコロジー的合理性にもとづく新しいU.P.の形成と、新しい経済システムを作り出しうるか否かにかかっている。それはブルカニロ図の「三角形4-2」の目指す方向なのである。

象徴能力を獲得し、文化プログラムによって社会や文化を形成し、近代科学技術や資本主義経済をここまで発展させてしまった人類はもはや象徴以前の生活にもどることはできない。BC7世紀からAD1世紀のはるか昔に、人類の固有の疎外構造を見つめ、それを克服する言説とふるまいを「リファインされたU.P.」という形で提示した、カリスマたちの教説は、改めて今日の観点から学び直されねばならない。と共に「近代というカリスマたちが経験しなかった新しい病」を克服するための、本来の科学と共にある、新しいU.P.の形成に取り組まない限り、人類と地球生態系はともに破滅をまぬがれないのである。

第三章 原点へ立ちかえるもう一つの根本的考察 —— 象徴の超越力と その疎外、リファインされたU.P. ——

I. nature から culture へ、記号作用から象徴作用へ、遺伝子プログラムから文化プログラムへ

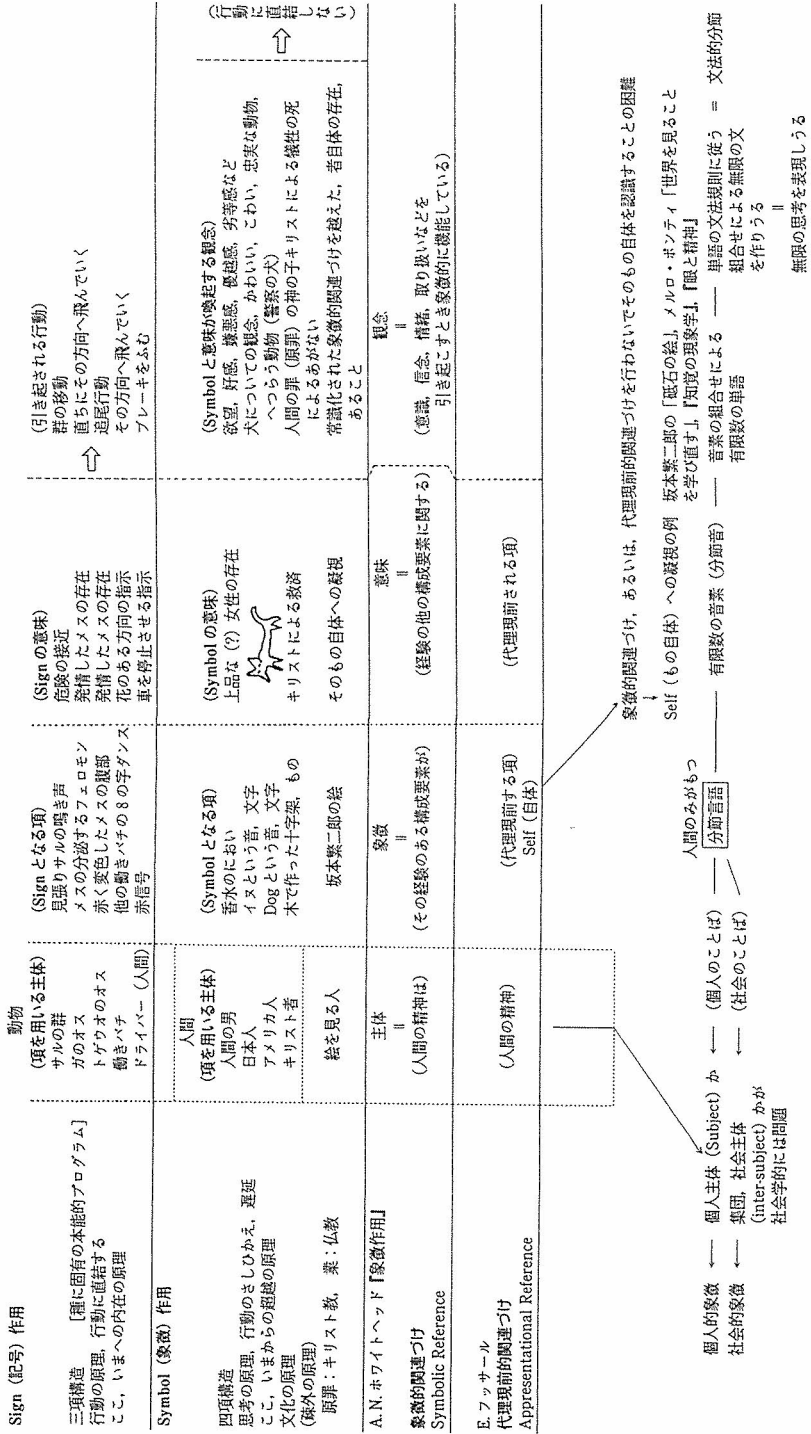
生物の一種属である人類が、生命の秩序に属しつつも、文化の秩序を形成するに至った秩序の、nature から culture への移行はいかにして成り立ったのだろうか。

この移行の原理として、私は動物も植物も生きものたちは、その存続（個体保存と種の保存）を遺伝子プログラムにもとづく記号作用によって行っているのに対して、人類は文化プログラムである象徴作用を行いうるようになったという、情報処理システムの変化に注目してきた。第Ⅲ図はそのことを示している。

記号作用と象徴作用の差異は、前者が三項構造（「記号となる項」「項を用いる主体」「項の意味」）であるのに対して、後者は四項構造（「象徴となる項」「項を用いる主体」「項の意味」「項の喚起する観念、情緒、取り扱い」）であることに見出せる。象徴作用が最後の項を含む四項構造になったことが、人間のみが、今でない過去のことを反省したり、未来のことを予想したり、ここでない他の場所のことを想像したりするという、「ここいまからの超越」を可能にしたのである。

動物の記号行動は鳴き声や動作やニオイ、味覚や触覚及び人間の五感をもたない種々の感知能力を媒介して行われる。例えばガのメスが発情期に分泌するフェロモンのニオイ（記号となる

S. K. ランガー『シンボルの哲学』



第III図 自然と文化 —— Nature から Culture へ ——

項)はオス(項を用いる主体)に感知されると、それは、そのニオイの方向に発情したメスがいること(項の意味)を知らせる。フェロモンを感知したオスは、ためらいも、羞恥も、劣等感や優越感もなく、直ちにメスのいる方向へ飛んで行って生殖行動を行う。これらすべてのプロセスは内在的、生得的な遺伝子プログラムによって行動が解発されるので、反省や思考の媒介なく、即行動に移るといって行われる。

しかし、人間のメスがつける香水は、極めて、ガのフェロモンと機能が似ているにもかかわらず、それが象徴として機能している時には、オスの側での即時の行動を解発するには働かない。人間の男性(項を用いる主体)が、香水のニオイを感知して(象徴となる項)、そこに香水をつけた女性がいること(項の意味)を認知しても、第四項である、観念、情緒、取り扱いが媒介となって、項を用いる主体の例での反省や思考、劣等感や優越感などが引き起こされ、直接行動には結びつかないのである。

象徴となりうる項は、音楽や絵画、味覚や触覚(点字)や臭覚(香道)など、五感で識別、分節できるあらゆる現象に拡がり、多様な象徴体系を人間は発達させてきた。その中で最も代表的でかつ強力な象徴体系が、人類のみが持ち得た「分節言語」なのである。

分節言語とは、有限数の音の分節(母音と子音)を素材として組み合わせることによって、有限数の単語(意味の単位)を作り出し、有限数の単語を有限数の文法的分節(単語の位置と機能を定める規則)によって組み合わせることにより、無限数の文(無限数の思考の表現)を作り出しうるといって、人類のみが開発し得た情報処理体系なのである。

人類が分節言語を代表とする象徴の諸体系を用いるようになったということは、人類の生活と行動が、内在的生得的な遺伝子プログラムにもとづく記号作用から、外部化した象徴体系という文化プログラムによって行われるようになったことである。文化プログラムは生得的なものではないから、人間の新生児は必ず学習によってそれを獲得するプロセス(社会化のプロセス)を必要とする。

生活と行動に必要な情報が、言語などの外部化された象徴体系の学習によって、次の世代に伝達されるようになると、外部化された情報は加速的に多くなり、蓄積、保存、伝達されるようになる。さらに口承のみによって情報が伝達されていた段階から、文字が発明されると、情報の蓄積は限りなく増大可能となる。そして文字、音声、映像処理がパソコンとインターネットで処理されるに至った現在では、情報の蓄積、保存、伝達、検索などが大量に短時間で処理できる極限にまで進歩しつつある状況となった。ここで逆に問題となるのは、「その情報が、人間の生活にとって疎外を生み出さない、生態系を破壊するに至らない、本当に役に立つものとなるかどうかという、情報の質」の問題である。

このように象徴を操る能力の獲得は、生物の一種属である人類を、情報処理の新しいやり方「象徴革命」によって、他の生物が絶対に為しえないような諸能力を拡大させる原因となった。それは人間のみが文化を創造し、発展させていくことを可能にする画期的な原理であると共に、

人間の社会の変化（力の獲得、進歩、あるいは退歩、U.P.の喪失）を加速化する原理であった。生物の種のレベルでの進化で、共通の先祖から二つの独立した種が成立するのに要する時間は、100万年単位の時間である。アウストラロピテクスからホモ・サピエンスへの進化には200万年ほどの時間がかかっている。それに対して、人類の社会は、わずか1万年の間に、狩猟採取の未開社会（環節分化社会）の段階から、古代中世社会（層分化社会）をへて、近代社会（機能分化社会）へと加速的に社会構造を変化させてきている。この変化はまた、地球上での人口増加と人間の活動による自然破壊の加速化をともなってきた。目前の21世紀の中ばには、地球上の人口が100億に近づき、ますます進歩成長していく近代的な生産と消費の様式は、地球生態系そのものを破壊するに至ることが予想される事態となっている。

nature から culture への変化、記号作用から象徴作用への変化が生み出したこのような短時間でなされた人類社会の変化と、それが生み出した目前に迫る危機に直面している現在、我々に必要なことは「人類も生きもの的一种であり、自然の一部である」という原点に立ちかえって考え直すことである。

II. 人間は生きもの的一种であるが、他の生きものなら絶対にしないような、おかしいことをしてしまう生きものである¹⁰⁾。

すべての生きものは、個体の保存と種の保存という目的論的な生命の秩序に従って生活している。個体保存の秩序とは、すべての生物が地球上に、個体として産れ、育ち、一定期間生存したのち、必ず死ぬということであり、その生涯の時間を生き続けるためには、必ず何かを食わねばならない、摂食、栄養活動を行わねばならない秩序のことである。

そして、「食う」という行為は、必ず他の動植物の生命を殺して食うことであり、個体が自らを保存し、死ぬまで生き続けるということは、他の生命を殺して食い続けるということを意味する。また、食うという行為は、食物となった他の動植物のいのちが、私の体の中で消化吸収されて、私の体の組織に変化し（私になり）、私の活動のエネルギーに変化する（私の活動や思考になる）ということである。

この観点からすると、「今朝食べた卵がいつ、どこから私になり、私の活動やその一つとしての思考になるか」という公案は、「延長をもたない思考する実体としての私の精神と、延長をもつ実体としての私の身体や食べ物となる他の生物の身体や物質との二元分割（デカルト）」が倒錯した思考であることを看破するための有効な思考実験の機会を与えるものとなるであろう。

自分の精神と身体、自分と他者、人間である自分と食物である他の生命（自然）は、それらを構成する物質、エネルギー、時間、空間の循環の観点からすると、相互に連続したり、入れかわったりしており、それ自体として存続しうる実体として二元論的に分割することはできないのである。

自然状態の中で生活している動植物たちは、食物連鎖による生態系的秩序というバランスの中

で生きているから、余分に食ったり、分解できないゴミや熱やCO₂を出して、生態系を破壊することはない。地球上のあらゆる生物の中で自然生態系を破壊するのは、文化プログラムによって生産したり消費したりする人類の経済活動のみである。農地の開拓、都市国家の建設、金属文明の進展、新しい耕地の開発、人口の増加、資本主義経済の成長などは、どれも人類の経済活動が自然破壊を生み出す画期となる出来事であった。ブルカニロ図における第一次と第二次の自然破壊と人口爆発の時期には、まだ地球上の部分的、地域的自然破壊に止まっていた。しかし、第三次の人口爆発と自然破壊においては、地球生態系そのものの破壊にまで規模が拡大されたことが切実な問題となってきたのである。

生きものの、もう一つの目的論的秩序は種の保存であって、個体はその生涯の間に、次の世代を残すため（遺伝子情報を保存し伝達するため）の生殖活動を行うことを課せられている。人類も種の保存のために生殖活動を行ってきたが、象徴作用による文化プログラムがそこに介在することによって、自然の中の野生動物たちならば絶対に為し得ないような倒錯現象を呈するようになった。

それは人類の生殖行動が、メスの発情期が固定しない形で行われるようになったことが生み出す諸現象である。人類以外の動物は、すべてメスの発情期が固定しており、それ以外の時期には生殖行動が起らない。

しかし動物にとっての生殖行動のウェイトは、ほとんど個体の生存意義のすべてを占めるほどに重いものであり、発情期になると動物たちはその活動に全エネルギーを集中する。ある種の昆虫や鮭の場合のように、生殖行動が終了することは同時にその個体の死を意味する、まさに命がけの行動である場合も多い。また、生殖を完了し、次の世代を生み育てるための摂食行動と発情期の固定は、一年のサイクルの中の環境から食物を摂取できやすい、特定の時期と不可分に結びついている。

そのような動物の生殖行動の、個体のいのちと存在意義をかけた真剣さ、切実さの観点からすると、避妊手段を構じた上で為される人間の性行動は、誠におかしなもの、非生物的なもの、人間独自のものであることが明白である。人類のみが為しうるあらゆる性的倒錯行動は、子孫を残すための生殖行動という本来の目的論的意義からすると、全く逸脱したものであり、自然状態の生物の間では原則的に生起しないものである。近代的な人間の観点からすると、正常な性であるとされる、生殖を目的としない成人男女の性行為も、生物の観点からすると最も生命の目的論的秩序から逸脱し倒錯した行為であることになる。

人類の男女の性が、子孫を残すための生殖という目的論的原則から外れて「他の動物が絶対しないような人類固有の性のあり方」を作り出してしまった原因は、「性が男女の人格としての統合や、人間関係や情緒関係を調整する象徴」として機能するようになったからである。性にまつわる象徴体系は、分節言語という中心的な象徴体系と並んで、人類にとっては常に強力な影響力を持つものとなってきたのである。性に関わる文化と象徴体系は、インセスト・タブーや婚姻制、

宗教や習俗、ポルノ産業や売春サービス業の展開などの中に、強力に表現され展開され続けている。

人類のみがもつ、生殖行動の（王家や神聖種族などの例外はあるが）通分化的、普遍的ルールは、インセスト・タブー（近親相姦禁止）である。一方、動物の群において明確にインセスト・タブーのルールを持つ種は存在しない。インセストが生物学的に種の存続にとって不利であること（負の遺伝子の濃厚化）は、近代科学の視点からは、はっきりしたことであるが、動物界ではそれをルール化するまでには至っていない。

人類がインセスト・タブーを普遍的なルールとして獲得しえたことは、象徴能力と文化プログラムの獲得を外してはその原因を考えることができない。したがって、人類はインセスト・タブー＝遺伝子の多様化という、環境への適応にとって生物学的に有利な通文化的ルールを獲得（Gain）したが、同時に、生殖を目的としない性行為やあらゆる倒錯した、性行為の形態を文化プログラムとしてもつに至った（生命原理からすれば Loss か？）哺乳動物であることになる。

動物は、異性や縄張りや食物をめぐる同種間の動物同志でしばしば斗争を行う。ライオンが縞馬を殺すのは摂食行動であって同種間の斗争ではない。ライオン同士が斗争するのは、上記の理由をめぐる、順位を決定するためであり、相手を殺すことが目的ではない。争いが起こり、一定の斗争が続くと、負けた個体は負けたことを伝達する記号行動（犬ならばしっぽを巻く、あるいは寝ころがって腹部を相手にさらす、日本ザルならば、四つんばいになって相手に尻を向ける）を行う。すると、遺伝子の中にインプットされている「攻撃性の抑制プログラム」が働いて、勝者は攻撃を止める。相手を殺すまで斗争することは、動物界では原則として起こらない。同種間で殺し合うことが、人間以外の動物種の目的論的秩序に合致しないからである。

それに対して、人間だけが同種間で相手を殺すまで斗争する。個人間での殺人や群れや国家間での戦争による殺人がそれである。人間は文化プログラムである象徴を獲得する（Gain）と同時に、他の動物がすべて保持している、攻撃性の抑制プログラムを喪失（Loss）してしまった哺乳動物であるということになる。近代化される以前の人間の子供の集団では、ケンカしても泣いたら負けというルールがあって、攻撃性の抑制プログラムが働いている。が、象徴をもってしまった大人の斗争では殺人や戦争に至る攻撃性の抑制プログラムの喪失が顕著となる。

この同種間で相手を殺してしまうまで斗争する、あるいは相手を殺すことで目的として斗争するという、象徴体系の学習をしてしまった大人の人類固有の行動様式は、すでに狩猟採取段階の人類の遺跡から確認できることである。それから 21 世紀に至る現在までの人類の斗争と殺人や戦争の歴史は、その規模が拡大の一途をたどり、石器から鉄器へ、弓矢刀槍の段階から、大砲、爆弾、生物兵器 化学兵器 核兵器へと進化する過程であった。

人類の文化プログラムの進化は一方で核兵器を生み出してしまったと共に、一方では遺伝子操作の技術を生み出してしまいう程に発展してきた。また地球を脱出して宇宙空間にまで人類の活動範囲を拡大しつつある。これは科学技術の発達による偉大な獲得であると言える。しかし未だ人

類は、すべての動物種が保持している「攻撃性の抑制プログラム」の喪失を補償しうる程の、「平和共存を保証する確実で安定した文化プログラム」の獲得はなし遂げていないのである。

遺伝子操作の技術が発達すれば、攻撃性の抑制遺伝子を人為的に作って、自分と自国以外の全人類に注入するということが可能となるかも知れない。多分それを発明した個人あるいは国家は自らにはそれを注入しないだろう。そしてこの想像は、核融合エネルギーを安全に安価に人間が作り出し利用できるようになるという想像と共に、「生きものとしての人類と、地球生態系の上で生きるあらゆる他の生きものたちにとって、最悪の悪夢」でしかない。

いま必要なことは「地球生態系の構成員である、一生物種としての人類」という原点に立ちかえって、考え直し、生き直すこと、「君子は為さざるあり」という枢軸時代のカリスマたちの教説にもどって、古い U.P. を回復することと、新しい U.P. を創造することなのである。

Ⅲ. 枢軸時代のカリスマたちのリファインされた U.P. に見出せる社会学的共通性

キリスト教の創世神話は、神の禁じた知恵の木の実をアダムとエバが食べる（神の掟への反逆）によって一方では目が開けて「神のような知恵」を得たと共に、罪ある者とされ（原罪）、エデンの園を追放されて「男は額に汗してパンを得、女は産みの苦しみを大いに増す」という苦難に直面するようになった物語りを伝えている。衣服（最も原初的象徴の一つ）の起源も、「アダムとエバの目が開けて裸であることを知り、いちじくの葉を腰にまいた」こととして語られている¹¹⁾。

仏教の教説は、生老病死という苦業を課せられて、前世、現世、来世を永劫に輪廻し続けて、そこから逃れることができないという人間のエゴ（業）を、無化する真の目覚め（悟り）を達成することによって輪廻から自由になる道を伝えている¹²⁾。

老子の「道徳経¹³⁾」は「人間が己のエゴにもとづいて、便利な機械や儀礼や道徳項目や諸制度や大国家を作り出したこと（人為）が、あらゆる不幸や災厄の原因であるから、人為をすてて自然に還る（無依自然）べきこと」を教えている。

ソクラテスは「無知の知が最高の知であること、人間が自らの知を絶対化する高^{フェブリス}慢を捨てて神の声（託宣）に従う謙虚さを回復すべきこと」を説いている¹⁴⁾。

これらの枢軸時代の宗教的、哲学的カリスマたちの教説には、その文化や宗教的背景の差異による相違が多く見出される。しかしそれらのメッセージの中に、都市国家文明の成立と発展という変化をもたらした、人間と自然、個人と社会、精神と身体の間二元分裂という社会的には共通の問題状況に対する、共通の認識と、それを克服する新しい、より普遍的、精神的な原理の提示（精神革命）という共通性が見出されることにも注目しなければならない。

それは、生きものたちの、nature、遺伝子プログラム、記号作用の秩序から、人間の、culture、文化プログラム、象徴作用の秩序への移行がもたらした、社会進化の軸での獲得は同時に、U.P. の軸での喪失を伴うという、人間の矛盾に充ちた存在構造への深い洞察（人間の原罪や業^{カルマ}）

や高慢^{フェブリス}や人為への洞察)と、それらから自由になるための教説「悔い改めて福音を信ぜよ」「人間のエゴからのあらゆる分別を捨てて、明らかに、自己や世界のありのままの本来の姿を見よ(諦)」「無知の知に目覚めよ」「人為を捨てて自然へ還れ」を示している点で共通している。それらは「カリスマたちによって説かれた、リファインされた U. P. の表現」である。そしてそれらは、我々が直面しつつある「21 世紀を迎えた人類と地球生態系の危機」に対処するための「人間の原点に立ちかえる反省」として、現在においてこそ原理的な有効性をもつものとして、絶えず見直されなければならないものなのである。

第四章 原点に立ちかえて考え直すための教育実践としての「キャンプ実習」 を「多元的リアリティ論」の観点から分析する

1. 認知的様式の六個の枠組¹⁵⁾からの分析

電気、ガス、水道のない、テレビも電話もパソコンもゲームもない「山の中で、食うこと、寝ること、遊ぶこと、そして学ぶこと」をテーマとして、原則3泊4日で追手門学院大学社会学科において、30年の間で既に20回ほどのキャンプ実習を行ってきた。試行錯誤をくりかえしつつ、しつこくキャンプ実習を行って来た、現時点での私なりの意味づけは以下の諸点にまとめることができる。

- (1) ブルカニロ図における、便利な文明の利器が何でもそろっている「近代社会」しか経験していない学生たちに、近代以前の、より人間の生活の原点に近い、直接に生まで自然や他者と関わる経験を与えること。
- (2) 近代化した日常生活の自明の経験を根本的に見直し、日常生活の中で二元的に分割されることが常識となっている人間と自然、個人と社会(仲間)自分自身の精神と身体それぞれの間の一体連続を体験する、U. P. の体験に目覚めるキッカケを与えること。U. P. の原点となる経験の場を提供すること。
- (3) 私自身が、絶えず「原点に立ちかえて考え直す」経験を更新しないと、自分が納得のいく「研究と教育」という大学教員としての職分ができないと思っていること。そして私にとっての原点が、子供のころから経験を積み重ねてきた「キャンプ経験」での自然や他者との「生のままでの関わり」であったこと。それが好きで、嫌いでないこと。
- (4) 大学の教室や研究室で型通りの講義やゼミをやっているだけでは、本当の全体としての自分自身を学生たちに提示することができないと思いつけてきたこと。ことばやロゴスだけで自分の考えや志向を表現することはできないという、ことばやロゴスのみに頼ることで、現実を処理できるというやり方に対する根本的な不信を持ち続けていること。
- (5) 寝食を山の中で共にするという経験は、「目利きの社会学」の立場からして、教室の状況では見えてこない学生一人一人の全体としての特性(長所や弱点や人間性)をよりよ

く目利きできる機会に充ちていること。学生同志・学生と教師との間の相互の目利きのチャンスとなる。

- (6) 深く集中したキャンプでの経験は、「本来的な人間の自然や他者との関わり、自分自身との関わりの原点」となりうること。少なくとも私自身にとってはそうであった。近代化した日常生活の自明を相対化し、疑わしいものとするような、日常生活の現実の異化体験を、感受性と集中力のよい学生たちは、できるということ（できない学生も多くなるが）を、自分の目で確かめること。
- (7) 大学生活4年間の中で「キャンプ実習」の思い出が、良くも悪しくもゼミの卒業生たちの再会の場で最も忘れ難い思い出の一つとなり、話題となっていること。矢谷ゼミの原点となる体験となっていること。
- (8) キャンプをやった以前と比して、キャンプを共に経験した後は、ゼミの運営がいろんな面でやりやすくなること。（お互いの相互認知と、人間関係の親密化、何でも話せる仲間だという安心感の土台みたいなものができること。お互いに、カッコつけたり、見栄を張る必要がなくなる。）

以下、多元的リアリティ論の観点から「キャンプ実習」の経験を分析する。

学生たちが学生として経験をしている日常生活の世界から、一時的に山の中へ移行して、自然の中で直接自然や他者と関わる、人間の生活の原点を経験することは、近代化した日常の現実とは異なった、それ独自の生きられた経験の様式をもった「キャンプ経験のリアリティ」を経験することである。

あるリアリティを、独自の他と区別しうる多元的リアリティの一つとして認定しうる根拠は、それを経験する人間自身が、日常の現実や他の多元的な現実と区別しうる、独自の生きられた経験の様式を経験しているか否かに見出すことができる。A. Schutzはそれを「認知的様式の六個の枠組」の形で体系的に論述した。そのSchutzの論述をできるだけ忠実に生かして、図の形で私が整理したものが第IV図「多元的リアリティの類型比較（認知的様式の六個の枠組）」である。

その後、Schutzの六個の枠組の中には、時間的視野があげられているのに対して、同様に重要な空間的環境要因と、行為に不可欠な人間の身体的要因が明示されていないことに気づいたことを初めとして、以下のような追加修正を行った。

- (1) 自発性の様式の項に、身体と空間の要因を入れること。
- (2) 日常生活の現実における行為、自己経験、他者経験に「ルーティン化」のメカニズムを導入すること。
- (3) ルーティン化した日常生活の現実における自己経験や他者経験は、Schutzの述べるIとMeの統合としての全体的自己（Total Self）とは言えない、非本来的な自己や他者

第IV図 多元的リアリティの類型比較 (認知的様式の六個の枠組) Schutzの記述からの要約とその修正, 2002. 5. 25. Y. Y.

	A 日常生活の世界	B 空想の世界	C 夢の世界	D 科学的思考の世界
<p>(一) 意識の緊張の減退。緊張の減少。ルーティン化のメカニズムが常に働く。</p>	<p>はつきり目覚めていること (wide a weakness) 生活への完全な注意 (full attentiveness) ルーティン化のメカニズムが常に働く。</p>	<p>日常生活の世界における意識の緊張からの撤退。緊張の減少。</p>	<p>意識の緊張が最低度となり、受動的注意 (petit perception) が生じられる。</p>	<p>細心な注意とはつきり目覚めた論理的思考によって特徴づけられるが、注意が向けられるのは、日常生活世界の諸対象ではなく、あくまで科学的思考の対象として選び出された対象である。</p>
<p>(二) 外的世界とそれの中の対象物が現にあるように存在していることについての疑念、疑問 (逆に言えば、世界の实在性とそれの秩序が明白とされ、信じられている) 基本的な不安 (死) 希望やおそれをもたずて生活が行われる。</p>	<p>外的世界とそれの中の対象物の存在とそれの頑固な秩序がエポケーされる。空想世界は、空想者の自由視点によって可変的である。</p>	<p>外的世界とそれの中の対象物とそれの秩序はエポケーされるが、夢の世界がエポケーされ、空想世界のそれのように自由に決められない。</p>	<p>外界とそれの中の対象物とそれの秩序はエポケーされるが、夢の世界がエポケーされ、空想世界のそれのように自由に決められない。</p>	<p>すべての利害関心から自由になった観察者の立場がもつ普遍的観点がとれる。(1) 現実的なエポケーの身体がエポケーされ、客観的な時間空間の中の科学の対象世界が設定される。(2) 日常生活的にも基本的な不安やブラクティカルなレリパンスの体系がエポケーされ、科学的思考者のもつレリパンスの体系とおきかえられ、世界を観察し、説明することを目指す思考行為であるが、世界に歯車をかませる実践的行為ではない。その結果が取り消しや再構成可能である点で、取り消し不能な結果をとらぬ日常生活の中での行為と異なる。</p>
<p>(三) 自発性・行為・行為空間</p>	<p>外的世界に対して自分の身体活動でもって直接働きかけ、歯車をかませる行為、思われた意味 (企画) にしたがってなされる行為。人間は世界の中に (in it) 世界に条件づけられて生きるしかないが、同時に世界に対して (upon it) 働きかけ世界を変化させることができる。なされた行為は取消不可能な結果を生むから、行為には責任がともなう。</p>	<p>抵抗する頑固な外界に働きかけ、それを実用的に変えたり利用したりするといふ、プログラムチックな動機から自由になっ空想が空想にとどまる限り、それを日常生活の現実の中で実現しようとする意志を欠いている。日常の空間から区別された空間の中で経験される。</p>	<p>自発性は最低度となり、夢の内容は受動的に決まり、夢の中では、夢みる者は夢の経過を自ら決められない。</p>	<p>世界を観察し、説明することを目指す思考行為であるが、世界に歯車をかませる実践的行為ではない。その結果が取り消しや再構成可能である点で、取り消し不能な結果をとらぬ日常生活の中での行為と異なる。</p>
<p>(四) 特有な様式</p>	<p>On Multiple Reality においては、部分的な一側面の自己 (Me) ではなく、全体的な自己 (Me と I の統合) 社会的役割という強制の中でルーティン化されることによって「部分的自己」へと陥落すること。</p>	<p>夢の中の自己経験は、内密な自己志向性が決定する夢のテーマと内容によって規定され、過去の生じられた経験の蓄積に起源をもつ部分的自己 Me である。</p>	<p>夢の中の自己経験は、内密な自己志向性が決定する夢のテーマと内容によって規定され、過去の生じられた経験の蓄積に起源をもつ部分的自己 Me である。</p>	<p>世界を観察し、説明する科学的な自己 (Me) ととの限りにおける部分的な自己 (Me)</p>
<p>(五) 性的・特有な様式</p>	<p>相互伝達と相互行為が行われる相互主観的世界と、自分的に同じような意識をもつ他人との直接、間接の社会関係、face to face の関係があらゆる社会関係の基本となり、相互伝達的前提となる。</p>	<p>空想世界は、孤立した個人においても (白日夢) 共同の空想 (子供のゴッコ遊び、集団的幻想) においても成立する。社会関係そのものが空想の内容となることとある。空想世界で出会う他者は、全体的人格としてではなく、典型化された部分的他者である。</p>	<p>夢の世界は本質的に孤立的であり、夢を他者と分有できない。夢の中で他者は、生き生きとした現在の中でたたえす変化する全体的な他者ではなく、典型としての他者とどまらる。</p>	<p>他者の経験も、一定の科学的観点から構成されるモデルとして経験される。社会科学におけるコミュニケーションのパラドクス：自分も社会の一部である社会科学者がかに社会を対象化できるか、対象化した科学的知識をいかに日常生活者に伝達できるかが問題となる。</p>
<p>(六) 特有な様式</p>	<p>内的持続 (Duree) と世界時間の出会いによって成立つ。標準時間。個人の誕生、成長、死に至るまで切れ目なく持続される生活史的時間。</p>	<p>日常的な標準時間の制約からは自由である。一つのコンサート・スポーツ試合など始まりと終わりがはっきり区別された瞬間。</p>	<p>日常的な標準時間の制約からは自由である。</p>	<p>科学的に設定された客観的物理学時間、科学的思考自体が展開される独自の時間、(過去の蓄積と未来の開かれた地平と関わりつつ、現在の科学的問題に取り組み) 科学者自身の個別なライフヒストリーの時間。20世紀後半に展開されるに至った、量子力学論の時間、空間。</p>

矢谷：原点に立ちかえって考え直すこと (6)

である場合もしばしばであること。

- (4) 日常を超越する他のリアリティの深く集中した経験の中で経験される自己の方が、「本来的で全体的な自己」である場合を考えてみること。
- (5) 日常からの他の多元的リアリティへ移行する場合の「移行のメカニズム」とその逆の「還帰のメカニズム」を考えること。
- (6) リアリティの経験には、「深さの次元」があり、深く集中した他のリアリティを経験したあと、日常生活に還帰した時、それが以前と異なったものとして体験される「異化体験」ともなうこと。異化体験が全く起こらないような他のリアリティへの移行と還帰の経験は、「ルーティン化された経験」として「真正の移行と還帰の体験」と区別されるべきであること。
- (7) 多元的リアリティの個人と社会における「分化と統合」のあり方を個体発生（社会化）と系統発生（社会進化）の観点から考察することが、社会学の立場からは不可欠であること。
- (8) 生活世界論と多元的リアリティ論を「人間の経験可能性の全体」を分析できる理論的枠組としてより洗練されたものに作り上げていくこと。

このような観点を導入することによって、私自身の「多元的リアリティ論」を作りあげていく過程において、私自身が少年の頃から経験してきて、私自身の自己形成や理論形成や教育活動の原点となったものが、さまざまな「自然と直接関わる経験とキャンプの経験」であった。キャンプの中で経験した、日常とは異なるリアリティへの感動の経験や、その中で最も私は自分自身であると感ずることができ、自発的に動くことができ、自然や他者とごまかしのきかない形でフェアーに関わることができたという経験（トータルな自己を実感すること）である。

キャンプの中で自分は高揚した「自然との関わり、他者との関わり、自分を自分らしいと感じつつ生きること、自分の心身の間に分裂がなく、丸ごと全体の自己として生きることができた」と思う。それに対して、日常の現実にもどったら、なぜ自分の生きざまは、感動のないつまらないくりかえしになってしまうのか、よそよそしい役割を演ずる自己に転落してしまうのかと疑問をもった。それが、私が多元的リアリティ論に執拗に取り組むようになった原点の経験であった。

そのような私の歩みをふまえて、追手門学院大学社会学科で実施してきた「分尾キャンプの現実」と「学生たちが大学生として暮している日常生活の現実」を修正された認知的様式の六個の枠組で整理すると以下のように記述できる。

(I-A) 大学生の日常生活における意識の緊張の様式

Schutzの規定では、日常生活の現実における意識の緊張の様式は「はっきり目覚めていること」「生活への完全な注意」を払いつつ行為することである。これは眠ったり、夢みたり、酔っぱらったり、病気になったりしていない「シラフでまじめで冷静な普段の意識、身体の状態で、

近代化した日本の日常生活を送っている正常な成人」の「自然的態度」がもつ意識の緊張の様式と言いかえることができる。

大学という場で毎日の学生生活を送っている学生も、教育研究活動を行っている教師もそれぞれの方で「はっきりと目覚めて、大学生活の中の諸活動に対して十分な注意を向けつつ生きて」いる。

しかし、Schutzが日常の現実に関して述べていない重要なことがある。彼は日常生活の現実が、もともと相互主観的な現実であり、人々の間に相互典型化を生み出し、日常生活を安定した予測可能なものにしていくことを指摘している。しかしそのことが日常生活のあらゆる側面に「ルーティン化」のメカニズムを及ぼすことについては深く分析しなかった。日常生活の社会的経験が毎日起る「くりかえしの経験」とまれにしか起らない「驚きの経験」から成り立っていることに注目したのは、Schutzの弟子のP. L. Berger¹⁶⁾だった。

日常生活のくりかえしの経験はなれ親しんでいて、予測可能で安定したものであり、その活動をやりこなすのに、あまり緊張しなくても、多くのエネルギーを消費しなくてもできることともである。学生ならば、朝起きて歯をみがいて、顔を洗って、朝食をとって、同じ時間に同じルートをたどって大学に出てくる。大学での授業は、それなりに緊張を要することであり、今まで知らなかったことを教師から聞いて驚かされたり、論理の展開を追うのに知的緊張を強いられたりすることもある。

本来、「ある専門の学問の講義を聞く」という経験は、多元的リアリティ論の原理的な観点からすると、日常とは異なった、日常を超越する「科学的思考の現実」を経験するということなのである。もしそれが真正のもの、深く集中した経験であるならば、日常生活の既存の常識をエポケー（判断中止）して、「科学的思考の世界」へと移行し、その世界独自の物の見方、考え方、確め方、その結果として形成される常識とは異なる科学的真理や理論に驚いたり感動したりすることである。そしてその科学の現実から日常の現実へもどった時に、日常の世界がその授業を受ける以前とは異なって見えるようになる異化体験は、日常生活の世界を変革する端緒となる（日常の変革をもたらす）ものなのである。

しかし、こういう授業を教師がすることも、学生がそのような経験としてその授業を受けとめることも、ごく希にしか起らない。大部分の大学の授業は、現行の制度の中でマニュアルどおりくりかえされるものでしかないことが多い。学生の側にとっては、「単位を修得して卒業するための、緊張や感動のない苦業」であり、教師にとっても、「給料をもらうために果す責任としての業務」となってしまう場合が多い。大学という場も、日常生活の中でくりかえされるルーティン化のメカニズムを逃れることはできないのである。

「知的興奮や深い集中、驚きや感動」なしに、大学の授業という「典型的な状況」の中で、「相互に典型化された役割」を担う教師と学生が、「典型的な双方の動機」にもとづき（学生は単位がとれさえすればよい、教師は職分を果す）、「典型的な行為経過」をたどり（学生は先生の板書

をノートに写す、あるいは居眠りしたり、私語を交す、教師はその日の講義を説明したり板書したりしつつ行う)、「典型的な行為結果」となって終了する(学生も教師もヤレヤレ終わったと思ひ、ある教師は学問の本来の型どおり「質問はないか」と問うが、日本の大学では質問は大ていないので、それで終る)。

ルーティン化してしまった日常生活の意識には、「高い緊張も、深い集中も、大きな感動も」あり得ない。上記のようなことが「大学の日常生活の現実」となってしまうのである。

人間にとって、日常生活のくりかえしがもつ「ルーティン化のメカニズム」は、Heidegger のような、「生まれれば必ず死ぬことが決定的に予定されている、かけがえのない単独者として、有限な時間の中で、それぞれ一回的な決断をしながら、世界と他者に立ち向う実存」ではなくしてしまう。それは「プラグマティックな動機にもとづいて、日常生活を大過なく生きる Das Mann への頹落」を不可避的に生じさせるものなのである。

(I-B) キャンプ生活の中での意識の緊張の様式

キャンプの経験においては、まず日常生活の空間からキャンプ場への移行プロセス(特に第1日目)において「驚き」とか「ショック」の経験を感じる場合が多い。電気、ガス、水道から、風呂や水洗便所、エアコン、テレビ、パソコンなど、あらゆる近代的都市生活の利器がそろっているのがあたりまえの学生たちにとって、「分尾キャンプの現実」における、それらが徹底的に何もないことはショックであり驚きとなる。

自ら山で集めてきた竹や木の薪を燃して炊事をしたり、夜の明りを得たり、寒い時には暖を取ること。川の水や泉の水を汲んできて飯を炊いたり、料理をしたり、川で洗い物をしたり水浴をすること。テントで寝ること。吸引式のポットン便所で大小便をしなければならないこと(希望者は野糞もできる)。これら多くの初めての経験に出合って驚き、山での生活に慣れるのに二日間ほどかかる。

その間、学生たちの意識の緊張の様式は、「はっきり目覚めていること」「生活への完全な注意」という形式的特性においては、日常生活と全く同じである。しかし山の中では、ルーティン化されていない初体験のもつ、強い切実な緊張をもって「はっきり目覚め、より注意して」山での生活に必要なあらゆる行為がなされねばならない。自然の中では、はっきりと目覚め注意していないと、台風や大雨や急流やスズメバチにさされるなどして、死んでしまう危険性への対処も課されているからである。

(II-A) 日常生活の現実がエポケー(判断中止)しているもの

日常生活を常識態度の中で生きている、学生も教師もが、自明として疑っていないことは、日常生活を構成している世界とその中の諸々の構成要素や秩序が、昨日から今日へ、そして明日へと同じようくりかえされ、持続していくことである。通常、人々はそのことを信じて疑っては

いない。そこで Schutz は、日常生活の現実がエポケー（判断中止、かっこ入れ）していることは、「世界そのものやその秩序が昨日と同じように今日も存続していくであろうことに対する疑惑、問い」であるという。

例えば、電気のスイッチを押して電灯をつけたり消したり、リモコンでテレビの電源を入れて、チャンネルを選択したりすることは、日常慣れ親しんでいて、あたりまえのこととして何の疑問も持たずにくりかえしていることがらである。したがって、「そもそも電気とか電波とは何か、何故スイッチを押せば電灯がついたりテレビが映るのか」という科学的問いを、スイッチを押すたびに考えるということは日常生活の中では起らない。電気や電波についての科学的知識なしに、スイッチを押して目ざす結果が得られれば、日常的態度としては何の問題もないからである。

日常実用的に用いていて何の不自由も感じない、電気や電波とはそもそも何かというようなことを、あえて問うことや、それに時間とエネルギーをかけて探求することは科学的思考の態度なのである。日常生活の現実では、あえて問えば問いうる、問うべき、科学的問い、宗教的問い、哲学的問い、芸術的問いなどをエポケーして、問わないようにしているから、プラグマチックな必要を充たす範囲で日常生活の多くのことがらがスムーズに処理されているのである。

逆に言うと、科学的思考の現実、宗教的現実、哲学的現実、芸術的現実などの多元的リアリティが成り立ちうるためには、日常生活の現実が「自明として疑っていないこと、毎日くりかえされる日常世界への信頼」をエポケーして、それらを「問題化し」「注意の焦点をそれらの問題に向け、集中してその問題に取り組んでいくこと」が必要なのである。

先に述べたように、「大学で近代科学を学ぶこと」は、日常とは異なる「科学的思考の世界」へ移行し、「それを深く経験すること」である。しかし学生や教師の大学での日常生活は、授業状況のルーティン化によって、それらを日常化してしまう。そこでは、「日常から科学的思考への移行する際の、意識の緊張の様式の変化を自覚したり、日常の自明をエポケーするというドラマティックな意識の転換をしたり、そこでの深い集中から日常の経験とは質と異なるものであることを実感したり、そこから日常へ還帰したとき、日常が以前とは異なって経験されるという異化体験をするといったようなこと」なしに、ただくりかえされる「ルーティン化された科学的思考の現実の経験」となりがちなのである。

(II-B) キャンプの現実がエポケーするもの

山の中の生活では、電気、ガス、水道、エアコン、電話、水洗便所、テレビ、パソコンなどの文明の利器がすべて物理的にエポケーされている。(要するにない。)と共に、それらを用いてなされている便利な日常生活での行為様式と、それにもなう常識がエポケーされる。またルーティン化された大学生活の中で出会う友達や教師との、相互に典型化された既存の関わりの方がエポケーされる。

それらすべてのエポケーの後に、「自然と直接関わり、学生同志、学生と教師が Face to Face

で寝食を共にしつつ、3泊4日の生活を山の中ですること、(人間が生きる原点を経験すること)が「取り組むべき問題」として課される。

このような日常的態度のエポケーと、新しいキャンプの現実への集中がなされる程度は、人によってさまざまであるし、参加者全員が作り出す、その年々のグループとしてのあり方によっても大きな差が現れることは、すでに報告したいろいろなケースによって明らかである。

キャンプの現実の中に入っているのに、日常生活の自明を引きずって、それをエポケーできない事例として、しばしば学生の感想文に現れることは、「川の水を飲むこと、火をたく苦勞、山道を荷物をもって歩くこと、水洗便所や風呂のないこと、夜が暗いこと、虫がいること、地面がドロコなこと、快適なベッドがないこと、暑さや寒さ、何をしてよいかわからないこと、などなど」である。

日常の自明をちゃんとエポケーして、山でのキャンプ生活の現実に、「心と体を開いて、新しい多くの経験に積極的に集中して関わる」という態度がとれば、山での生活は限りなく豊かな、自然に対する驚きや発見や自分自身や他者への気づきを見出しうるものとなる。

(Ⅲ-A) 大学の日常生活における自発性の様式(空間、身体、行為)の様式

大学での生活空間は、制度化された、キャンパスの中の空間としての大教室やゼミ室、図書館や実習室、クラブ室や食堂や便所や校庭やグラウンドや体育館などである。それぞれの状況の定義にしたがって、それぞれにふさわしい、「身体、服装、行為やふるまい、会話や思考」の様式が作り出されている。それは空間としては、都市化近代化された大学の空間であり、あらゆる文明の利器にかこまれた、「便利、清潔、快適」な空間である。

そのような空間の中での「身体、行為、思考、発言や語りあいの様式」は「ルーティン化され、くりかえされる、あたりまえのこと、自明のこととして、疑問をもたずに、あまり緊張しないでもなしうる、慣れ親しんだ大学生活」を形造っている。

Schutzは、日常生活の現実の中で為される行為は、「自らの身体でもって外界や他者に直接、歯車をかませる行為」であること。その行為には取消不可能な結果がともなうこと。そして、行為者は自らの行為の結果に対して責任を負わねばならないこと。を強調している。

しかし、ルーティン化された日常生活の現実、「責任を問われないように生きるメカニズム(相互典型化と予測可能性)」を内蔵しているから、その中で責任を問うたり、問われたりすること、問題やトラブルが起ることは、最小限におさえるという傾向をもっている。

日常生活の現実の中での、人と人との対面的な出会いに関して、Schutzは、直接的なこいまでの我と汝の出会いにおいては、常に既存の典型化や予測可能性をこえた、新しい側面が現れうること、ハプニングが起る可能性が原理的に含まれていることを強調している。しかし、実際の日常生活の現実の多くの場面では、そのような新しい側面の出現やハプニングは、ルーティン化のメカニズムによって、極力起らないように調整されているのである。

その結果として、日常生活の現実、大部分が驚きや深い集中や感動の乏しい「たいくつな日常の中の身体、行為、空間の様式」へと頹落するものとなる。

日常生活の現実というものは、大部分が毎日の生活のくりかえしで成り立っている以上、そのようなルーティン化、習慣化、たいくつ化を免れることが至難の業となる現実である。それを突破するのに有効な方法は、日常とは異なる他の超越的現実への真正の移行と日常への還帰がもたらす、日常生活が以前と異なって経験されるという異化体験を積み重ねていくことである。

(Ⅲ-B) キャンプの現実における自発性の様式 (身体、行為、空間の様式)

慣れ親しんだ大学生、教師としての日常からキャンプの現実へと移行すると、自然と他者への関わりにおいて、すべてが新鮮で、驚きに充ちた、既存の典型化や常識的枠組で処理できない空間、身体、行為、思考と語りが要求されることになる。自然の中で自然を相手になされる行為は、より切実で、ごまかしのきかない、結果責任が明白で、時には命にも関わるものである。それは日常のくりかえされ、たいくつとなった経験とは異なる「驚きや深い集中や感動」をともなったものとなりうる。

文明の利器のない、山の中の状況で「自然と直接関わりつつ、仲間と共に生活すること」。3泊4日という短い時間ではあるが、とにかく「山の中で、食って、排泄して、寝て、起きて、遊んで、そして学ぶ」こと。それは、「人間の生きものとしての原点に立ちかえて生きてみること」である。近代文明の利器が発達している社会関係の中でそれを享受して生活するということは、自然との関わり、他者との関わりの中に、人工物や人工的な制度や約束ごとなどの象徴作用の結果である、媒介物が幾重にも積み重って、「ここ、いまでの、自然との出会い、他者との出会い」の直接性、原初性、根源性が、希薄化されていくということである。この関わりからの直接性から間接性、媒介性へ、原初性から派生性へ、根源性から末端性へという変化の加速化こそが、近代化とその進展によってわれわれにもたらされたものなのである。

キャンプ実習という大学の社会科学としては常識的でない、私が作り出した実習プログラムは、そのような近代の原理を、原点に立ちかえて見直し考え直し生き直すことを、自らと学生たちに課すものなのである。

このようなキャンプ生活の経験の中で、自発して、心と体が自然や他者に開かれた状態で、関わりを作っていくことができた学生たちにとっては、以下のような、新鮮な驚きや楽しさや自己発見や他者発見の経験となる。「川の水が直に飲める。みんなで協力して作った食事は大変おいしい。初めて木に登って枝打ちがやれた。マキの火で料理ができた。仲間ととことん話しあえた。自分を自分らしいと感ずることができた。夢中になって、我を忘れて取り組んだ。」などの感想文がそのことを示している。

このような経験を別のことばで言うと「ここ、いまで、他のように生きるのではなく、このように生きている自分自身に、何の異義も、やましさも、疑問もない」という経験なのである。

逆に、キャンプの状況に移行したとき、日常と異なる野性の自然との出合のショックが大きすぎて、心と体が閉ざされて、ディフェンスメカニズムが前面に出てしまうと、85年のキャンプの「ギャル文化」の反応のような、「一刻も早く家へ帰りたい。あるいは、イヤイヤがまんをして、早く終らないかと思いつつ、3泊4日が過ぎてしまう」という、さえない、マイナスイメージの、自分を自分らしいと感じられない経験となってしまう。

このような両極の反応としての自発と強制、開かれることと閉じること、積極的関わりと逃げ腰の関わり、自信と自己不信、他者への信頼と不信、自分らしいと思えることと思えないこと、などの中間には、^{プラス}と^{マイナス}の経験が入りまじったさまざまなケースが起こりうる。

要は、経験する主体が、課された山の中でのキャンプ生活という経験を、より^{プラス}の開いた、自発的なものとして受けとめるか、より^{マイナス}の閉じた、他発的なものとして受けとめるかによって、「同じことがらや経験」が全く異なったものとして経験されたり評価されたりすることになるということなのである。

あらゆる教育の要諦は、「課されたものやこと」が「自発的なものやこと」へと変換するプロセスの中にある。そして、そのことが最も具体的に明白になるのが「キャンプ実習」なのである。

(IV-A) 日常生活の中の自己経験の様式

近代化され、ルーティン化された大学の日常生活の中での自己経験の様式は、Schutzの言う「全体的自己」である場合もあるが、「役割に規定されて、イヤイヤそれにふさわしい自己を演じていたり、劣等感やコンプレックスによって、生き生きとした全体的自己であるよりも、自分を自分らしいと思えなかったり、現実への閉塞感によって、ムカついたりしている自己」である場合が多い。近代社会とは、そのように人間をし向けていくメカニズムを内蔵しているシステムなのである。

私の上記のように、修正された「近代化された日常生活の現実における自己経験の様式の規定」は以下のようなものである。

自分を自分らしいと感じつつ、日常生活の現実を、生きものとしてピチピチ生きることができていると、自ら思い、他者もそう認めることができる場合には、その自己を「全体的自己」と言ってもよい。しかし、近代社会の組織や制度によって、役割を強制されたり、劣等感やコンプレックスに圧迫されたりして、自分自身として、全体的自己として、ピチピチ生き切れていないような日常生活を送っている自己は、「部分的自己」と言うべきである。そして、近代化した日常生活の現実では、我々は多くの場合、後者の特性をもつ部分的自己であることを余儀なくさせられているというのが、私の見解である。

(IV-B) キャンプの中での自己経験の様式

キャンプの現実に関わって自発的に自然や他者と関わる事ができている場合には、たいくつ

な日常におけるルーティン化された自己のあり方とは異なった自己経験が行われる。自然や他者と、日常とは異なるし方で直接関わる経験は、多くの場合、緊張とエネルギーの集中を必要とする驚きの経験であることが多い。とてもできないと思っていた高い杉の上での枝打ちの作業に、前向きに取り組んでやってみたらできたとか、簡単にできると思っていた薪で火を炊くことが意外と難しかったが、だんだんうまくできるようになった、とかのキャンプでの経験は、人間の原点に関わる自己再確認と自信の経験になる。それらに真剣に取り組んでやり遂げることができた自己を、自分らしいと感じることができる。日常的な役割規定やコンプレックスの重圧から解放されて、自然の中で直接他者と協力して、自然に働きかけ、必要な仕事に取り組み、それをやりとげて（薪で火を炊いてみんなの食事を作った）、その結果を直接味わう（そのようにして作った食事は大変おいしかった）、という経験は、「自分を自分らしいと感じうる原点となるような経験」なのである。

このような経験はキャンプ生活の中でなされる「全体的自己」の経験であると言いうる。本シリーズ第一稿で記述した「キャンプ経験の自分史」で記したように、私自身にとっても、「それを為している自分自身が、何のやましさも疑いもなく、自分らしいと感じられ、楽しさや充実感や満足感や達成感が持てる」という経験は、「より本来的な全体的自己」を実感しうる原点となるような経験であった。

しかし「キャンプ状況」に対して心と体を閉ざしてしまうと、「単位のためにイヤイヤ来させられたが、自然の中での他者との関わりに対応できず、ひたすら便利で快適で清潔な町の生活へ一刻も早く帰りたい」と思いつづけつつ、与えられた仕事をとにかくこなし、がまんしてやり過ぎという、「みじめな自己」になってしまう。

自然や他者への開いた関わりと閉じた関わり、を区別しうるメルクマールは、「それを全体的自己として楽しんでやれるか否か、自分らしいと思えるか否か」という単純なことである。そしてこの基準は他の芸術や科学、スポーツやゲームなどの日常生活の現実とは異なる超越的現実の経験に、同様にあてはめて見るができることなのである。

(V-A) 日常生活における他者経験の様式

大学での日常生活において出会う、学生仲間や教師との関わりのある方は、「相互主観的な、大教室での授業、研究室でのゼミ、クラブやサークルの活動やコンパなどというような、それぞれの場面の状況の定義」に従った、典型化されたものが大部分である。典型化とルーティン化のメカニズムは、日常生活の現実を規定する最も基本的枠組であって、それは、自分がこう言えば相手はこう返す、こう行為すればこう返ってくるという、予測可能性や安定性を保証し、緊張しないで対応できることを、自己にも他者にも確保してくれるメカニズムである。

それぞれの「状況の定義」に合せて、我々は自分自身と他者を相互に典型化しつつ関わりを作っているが、その典型化は、社会通念や常識の範囲の中で決められている学生同志としての役

割、学生と教師としての役割などの、一般的典型化をこうむっているだけではなく、この人はこういう個性や能力を持った人だという、個性的人格に関わる相互典型化をも含んでいる。

自分の個性に関わる「自己呈示」のし方や、その自己呈示が他者に与えるであろう「印象操作」もまた、相互典型化のメカニズムの範囲で行われているのである。

しかしこれらのメカニズムは、同時に日常生活の現実の中での他者経験を、驚きや感動や新しい発見の少ない、たいくつなくなりかえしにしてしまい、マンネリズムに陥らせるものでもある。

全体的自己が全体的他者に、お互いの全人格をかけて、それぞれの個の中心から真正面に関わりあうとか、対決するというような事態は、日常的な相互典型化で処理できないような希にしか起こらない、葛藤やケンカや問題状況や危機状況でしか通常は生起しないのである。

(V-B) キャンプ経験の中で出会う他者

日常的な大学生活から移行して、キャンプ生活を3泊4日という短い間であっても行うということは、「今まで経験したことのない、直接自然と関わり他者（学生同志、学生と教師）と関わるという、新しい状況に投げ込まれるということである。参加者はそれぞれ、「大学の日常」とは異なった、「何もない山の中でのキャンプ生活」という、「新しい状況の定義」に手さぐりで適応し、その場面にふさわしい自己呈示や言動を、相互作用の中で作りあげていかねばならなくなる。

そこで起ることは、日常の相互典型化の中では見えなかった他者の性格や能力の新しい側面が現れることへの驚きや、自分自身が日常とは異なった自己を経験することへの発見や気づきである。自然の中で協力して、とにかく「食う、寝る、遊ぶ」を行うことは、日常的な自己典型化や他者典型化では対処できない、より切実な状況での意外性や新しい側面を現出させる。

「彼あるいは彼女は、こんな人だと思っていたのに、山の中ではそのような既存のイメージとは違う側面が見えてきた。自分自身をこんなヤツだと思っていたのに、山の中では意外にこんなことができた、できなかった、言えた、言えなかった。」

キャンプ経験はこのような、新しい自己経験や他者経験や、出会いを参加者に与えてくれるのである。

(VI-A) 日常生活の現実における時間的視野

日常生活の時間は、自覚をもたないで、自分で選択したわけでもなく、この世に生まれてきたという、自己の誕生から、社会化のプロセスをへて、自覚的存在となり、自分なりに人生設計を行い、学歴や職歴を自ら選択し、自らの生活様式を作り、やがて年老い、必ず死に至る、始まりと終りがはっきりとした、しかしその間は切れ目のない持続として続いていく、個人としての生活史的時間である。

Schutzはまた、そのような生活史的時間を生きている我々が、日常生活の中で経験する時間を、標準時間と名づけている。標準時間とは、自然の移り変わりや昼夜の区別や社会的に決められ

ている行事暦や労働と休暇のサイクルによって成立つ世界時間と、個人の内面的な意識の流れによって成立つ主観的時間との交叉にもとづく、相互主観的な日常生活の時間のことである。

近代化した社会の中で行われている大学生の日常生活における標準時間は、一年の学年暦や一週間の授業時間割や、クラブやバイトの時間割、などによって、暦と時計によって管理された、それぞれの時間とそれに対応する行動をすることが予め決められ、課せられている時間である。この時間の大枠はそれぞれの主体が関わる制度によって、課され管理されており、その枠の中で主観的、個人的時間のあり方を自ら考え、計画し、それを実行できたりできなかったりしている、暦と時計で管理することが不可避な時間である。それは「忙しくて、早く過ぎ、常に追いつてられないこと」を特徴とする場合が多い、近代社会に特有の時間である。

と共に、この時間は、その中味がどのようなものであれ、イヤでも応でも、自らの死でもって終了するまで持続し続ける、自らの生存の条件となっている時間である。

M. Ende は『モモ』の中で、近代社会のもつ、「時間節約と経済成長を強制されている時間」と「本来的な、全体的自己としての人間によって生きられている時間」を区別している。そして後者について「けれども時間とはすなわち生活（いのち）なのです。そして生活（いのち）とは人間の心の中にあるものなのです」と述べている。その上で、近代社会というメカニズムを、人間から生きた時間をうばい続け、人々を経済成長と時間節約にかりたて続ける「時間どろぼう」のメカニズムとして描いている。

(VI-B) キャンプ生活の中で経験される時間体験

まず、キャンプは3泊4日とか、4泊5日とか、その始まりと終わりがはっきりと日常の持続から区切られた、一定の限定された時間の中で行われる。この「はっきりと区切られた時間」であるという特性は、「日常生活の標準時間」が死ぬまで中断することなく持続するのに対して、他の多くの多元的リアリティの時間が共有している特性である。一つの劇、コンサート、スポーツ試合、ゲーム、宗教的儀礼、科学の授業などは、いずれもその始まりと終わりがはっきりと区切られた一定の時間が設定されている。

日常の時間から「キャンプ生活の時間」へ移行することは「日常とは異なった時間経験の様式を生きること」である。そのことは何よりも「時計なしキャンプ」を実施したときに明らかとなった。時計なしキャンプを経験した学生たちは感想文の中で多くのことを述べているが、その特徴を要約すると次のようになる。

「一日の自然の変化に合せたマイペースの時間。なにをしてもよい自由な時間。ゆったりと過ぎてゆく時間。自分の体のリズムと一致している時間。自分らしさを実感できる時間。時間を忘れて取り組む、深く集中した自然や他者との出会いの時間。」

これらとは逆に、キャンプ状況に対して心と体を開けなかった場合には、「マイペースがつかめず、居心地が悪く、自分らしさを感じられず、何をしてよいかととまどい、とにかく早く便利

な日常生活へもどりたいという思いに迫られて、ここいまでの自然や他者との出会いに集中したり、楽しんだり、味わったりできない、早く終わってほしい時間」となってしまう。

いずれにしても、キャンプ経験の時間は、死ぬまで続く日常生活の時間に対しては、ごく限られた、3泊4日という短い時間、一時的な非日常への移行の時間にしかすぎない。

しかし、その限られたキャンプの時間の中での経験が、「深く集中した、感動や、そこで自分は全体的な自分自身として生きかつ他者や自然と関わることができた、U.P.の経験（自分と自然、自分と他者、自分の精神と身体が一体連続であるという経験）」にまで深まったものとなることもある。そのような経験のあと、キャンプを終えて、日常生活の現実へ還帰すると、日常の現実がキャンプに行く以前と比べて、何かおかしい、異なったものとして経験されるということが起る。

それを私は、「日常生活の現実の異化体験」と名づけている。それは、「キャンプで経験した現実やその中で生きていた自己の方が本当のもので、もどってきた日常生活の現実とその中の自己は、本来的なものではないニセモノなのではないかという感じ」である。しかしこのような思いは、何日かたつと、すぐに日常生活の現実の圧倒的な力によって、かき消されてしまい、気がついてみると、再び忙しく、「役割に規定された、相互典型化と、ルーティン化の中で業務をこなしているたいくつな自己」にもどっていることが普通の場合である。

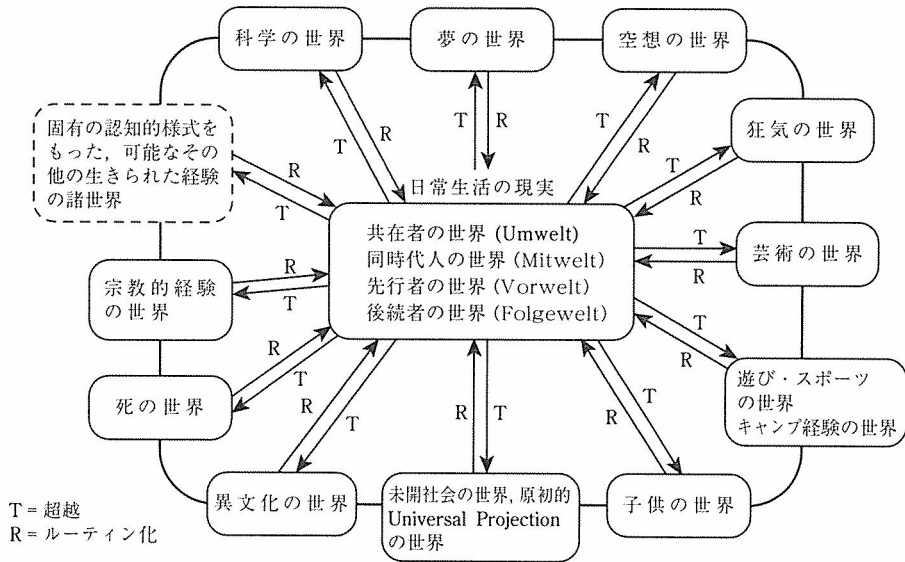
少年時代から、キャンプでの高揚した経験と日常へもどった時の異化体験を何度も経験したが、私の多元的リアリティ論への執拗な取り組みの原体験となったのである。

II. 「日常生活に現実のアクセントをおいた多元的リアリティのルーティン化」と「超越的リアリティに現実のアクセントをおいた、日常生活の現実のルーティン化」

そのような自らのキャンプから日常へもどった時の異化体験の積み重ねと、そのような問題意識に解決を与えてくれるかも知れない理論的手がかりとして私が必死に取り組んだ「多元的リアリティ論」の中から、以下の二つの図で示しうような考察が生まれてきた。

第V図においては、近代化された日常生活の至高の現実、「日常生活の世界に現実のアクセントをおいて多元的リアリティがルーティン化されている世界」として性格づけられている。

第V図の真中にかこまれているものは Schutz が日常的な生活世界の社会的構造とよんでいるもの、すなわち共存者の世界 (Umwelt) 同時代人の世界 (Mitwelt) 先行者の世界 (Vorwelt) 後続者の世界 (Forgewelt) のすべてを含む。と共に、「象徴・現実・社会」論文では、象徴の媒介によって日常生活の現実を超越するものとしてあげられていた、我等関係それ自体、社会的集合体、及び制度化された関係をも含む範囲である。これらはすべて社会的関係に属する範囲であるがここでは一応それらすべてを一括して、本来的な意味での日常生活の現実としている。日常的な家庭生活や職業生活、大学での日常生活、はすべてこの範囲の中で経験され、Schutz が「日常的な生活世界」としてその空間構造、時間構造、社会的構造、知識の構造、^{レリバンズ}妥当性の構造、



第V図 日常生活の現実リアリティのアクセントをおいた多元的リアリティのルーティン化 (近代社会)

典型的の体系等々として分析記述したものの全体を含んでいる。それに対してまわりを取り囲んでいる、夢の世界、空想の世界、科学の世界、狂気の世界、芸術の世界、遊びやスポーツの世界、キャンプ経験の世界、子供の世界、未開社会、異文化の世界、死の世界、宗教的経験の世界、「その他あらゆる、それ自身の認知的様式をもった、他から区別できる世界」は、相対的に日常生活の現実からは自律した独自の世界をなしている。それらが日常生活の現実から区別されうる基準は、Schutzの理論によればもちろん、認知的様式の六個の枠組のそれぞれが日常生活の現実と異なるからである。この基準はあくまで孤立した主観の認知的様式を視点としてとっており、そのような基準で多様なリアリティのちがいを識別する理論的な志向をもった私のような、主観にとってのみ妥当するものである。そのような理論的志向を持たない日常生活者である学生たち学者たちにとっては、これらのリアリティと日常生活のリアリティの区別は明確でない。

日常生活者にとって、リアリティの移行が感じられるのは、極端に恐い夢から目覚めた後とか、演劇や音楽の世界に全人格的に没頭したあと劇場やホールの外へ出て、日常生活の世界にもどった時に、日常生活の世界が以前と異なって体験されるといった、異化体験を伴うような場合である。キャンプを経験した学生たちの何人かは、この異化体験を感想文の中で述べている。

通常の日常生活では、認知的様式の差異という理論的な観点をもたない生活者や学生たちは、理論的枠組からすればはっきりと区別される多元的リアリティをルーティン化して経験しているので、たとえ図に描いたすべての種類のリアリティを経験したとしても、「自分の生きる現実の一つであるという信念」を放棄しないのである。いわば日常生活に生きている生活者にとっては、リアリティの多元性や差異性についての問いがエポケーされているのである。この事態を私は、

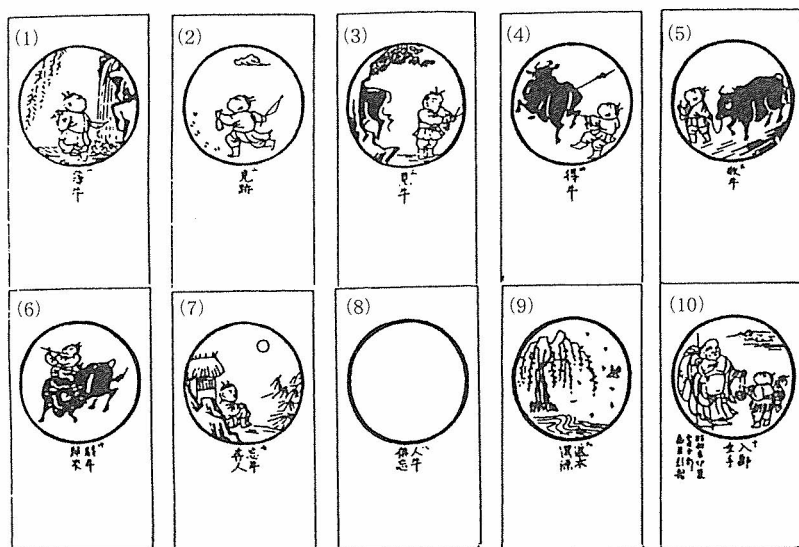
「日常生活に現実のアクセントをおいた多元的リアリティのルーティン化」とよんでいる。日常生活者にとって、多元的リアリティの経験は「同じ身体をつねにともなう限り、同一の意識の流れによって生きられる限り、さらに同じ日常言語によってすべてが日常生活の中で語られうる限り、そしてそれらが資本主義的商品として貨幣によって購入しうる限り、」日常生活の現実とラジカルに区分されず、身体、意識、日常言語、貨幣によって媒介されルーティン化されるものとなるのである。

以上のような、多元性リアリティのルーティン化の考察をふまえて、次に問題となるのは、「リアリティを経験するときの深さの次元」の問題である。

先にのべたように、リアリティの移行が自覚されるのは、一つの超越的リアリティに身体や気分の層をも含めた全人格的没入を行なった後に、日常生活の世界にもどった時のショックや異化体験においてであって、そこにはルーティン化された通常の場合と異なる経験の深さの次元が示されている。ここで、リアリティの深さの次元を段階的に示すと共に、「日常生活に現実のアクセントをおいた多元的リアリティのルーティン化」の逆の現象「超越的な宗教的リアリティに現実のアクセントを置いた、日常生活のルーティン化」を示す極限事例として「禅の十牛図」をあげておきたい。

第VI図は、「禅の十牛図」として知られるものであり、中国の宋代に鼎州梁山に住した廓庵和尚が図と頌（韻文）を書き、それに弟子の慈遠が序（散文）を付したものである。禅の悟りが深まりゆくプロセスを、絵と韻文と散文という三種類の形式で表現している。

若い求道者が失われた牛を求めて山野に尋ねさがしに行く。ここでは牛は禅の悟りあるいは本



第VI図 禅の十牛図

来の自己を象徴している。この牛を尋ねる段階が尋牛第一である。探求者は道に志ざし求道の努力を重ねやがて牛の足跡を発見する。これは先人たちの教説や経典を手がかりとして悟りの方向づけが与えられることを示す。この段階が見跡第二である。次にとうとう悟りの一部を発見する段階に達する。見牛第三。悟りは単に知的に発見されるだけでなく自らの実存によって体得されねばならない、その体得の段階が特得第四である。ところがこの悟りの体験は奔放不羈であって、野性にもどった牛が人間につかまえられてもあばれまわるように統制ができない。そこで鞭と手綱で牛を飼い馴らさなければならない、鞭と手綱は、覚醒と統制を象徴している。飼い馴らされた牛は、もはや意識してつかまえていなくても、自づから主人についてくるようになる。この段階が牧牛第五である。探求者は牛を飼い馴らすとやがて牛の背に乗って笛を吹きつつ家に帰ってくる。家は本来自分が帰るべき自己、本来的自己を象徴している。この段階が騎牛帰家第六である。やっと自分の家に帰り着き牛小屋に牛をつなぐと鞭も手綱も放り出して牛のことは忘れてしまう。これはすでに悟りを得てしかも悟りにとらわれなくなったがまだ自我が残っていることを示す。この段階が、忘牛存人第七である。さらに悟りのリアリティが深化すると、牛のことも自分のことも共に忘れてしまう。ここに至って「仏教的な無あるいは空のリアリティ」が完成される。このリアリティこそ仏陀以下の祖師たちが達成した悟りの完成である。この段階が空円相で描かれている、人牛俱忘第八である。そしてこの境地に達すると、自己の本性に返り根源に還って、有とあらゆるものが、そのあるがままの自然の姿で体験され自我の働きによるあらゆるゆがみが取り去られる。この段階は、人牛俱忘において達成された空あるいは無の境地（主観）の裏面（客観）を示すものとされる。これが、返本還源第九である。第八、第九の段階は、禪的な悟りの究極地の主観的側面と客観的側面を示すものであって、他の牧牛図ではこの第八の空円相で終わっているものが多い。が、廓庵の十牛図の特色は、第九図にさらに加えて、入塵垂手第十を付加したことである。これは、悟りのリアリティに自己完結してしまわないで、手を垂れて、（何もしないで）町（塵）にもどってくること、日常的なリアリティに返ってくることを示している。この最終段階では、若い求道者は、すでに布袋和尚のような偉大な師匠になっている。図では、布袋和尚のような人物が、若い魚をになった男に出合っているが、このような出会いが、若い男をして再び本来の自己への探求に向わせるのである。

この入塵垂手の段階では、禪者のリアリティのアクセントは全面的に仏教的な悟りの上におかれており、しかも彼は日常生活の世界の中で日常生活をルーティン化して生きるのである。ここには、「日常生活に現実のアクセントを置いた多元的リアリティのルーティン化」と全く逆の現象が示されている。それは、禪的な悟りにリアリティのアクセントを置きつつ、自由に日常生活と関わる、彼岸にありつつ、比岸の現世を生きる独自のリアリティを提示している。まさにそれは、「超越的リアリティに現実のアクセントをおいた、日常生活の現実のルーティン化」と名づけるあり方を示しているのである。そのような事例の唐代禅仏教の表現は、南陽慧忠の「無常説法」や南泉普願の「異類中行」に見出せる¹⁷⁾。

注

- 1) 矢谷慈國「生きていく原点に立ちかえて21世紀の地球上での人間の営みを考え直すこと(1)——自然との関わり, キャンプ経験の自分史——」『追手門学院大学人間学部紀要, 第8号』1999年8月, 「原点に立ちかえて考え直すこと(2~5)——追手門学院大学社会科学におけるキャンプ実習の報告と考察(その1)~(その4)」『追手門学院大学人間学部紀要, 第10号, 11号, 12号, 13号』, 2000年9月, 2001年3月, 2001年9月, 2002年3月.
- 2) 矢谷慈國「街角文化論④——人間のみなさんへ——」『コンステラツィオン』1993年2月号, No. 274.
- 3) 矢谷慈國『賢治とエンデ』. 第一章, ユニバーサル・プロジェクションと宮沢賢治『『春と修羅』序』について. 近代文芸社. 1997年.
- 4) 矢谷慈國『生活世界と多元的リアリティ』関学生協出版. 1989年.
- 5) M. メルロ・ポンティ『行動の構造』みすず書房. 1964年.
- 6) 注3)で掲げた拙稿および序:あとがき参照.
- 7) F. カブラ『タオ自然学』工作社, 1977年
- 8) 注3)の拙稿.
- 9) ローマクラブレポート『成長の限界』ダイヤモンド社, 1970年. 及び, 1970年以降の「国連の諸統計」参照.
- 10) 矢谷慈國「宇宙, 地球, 人間——秩序のゆらぎと地球生態系の危機について——」『追手門経済論集, 第27巻第1号』1992年.
- 11) 『旧約聖書, 創世紀』
- 12) ひろさちや監修『仏教の知識百科』主婦と生活社. 1986年.
- 13) 『老子』武内義雄訳, 岩波文庫. 1943年.
- 14) プラトン『ソクラテスの弁明/クリトン』岩波文庫. 1964年.
- 15) 矢谷慈國『生活世界と多元的リアリティ』「2 アルフレッド・シュッツの多元的な意味世界論と象徴の問題について」「3-I, 3-II 多元的リアリティをめぐって(1)(2)」「4. A. Schutzの理論における生活世界概念の問題点」関学生協出版会. 1989年.
- 16) P. L. バーガー, B. バーガー『バーガー社会学』学習研究社. 第1章. 1979年.
- 17) 矢谷慈國「無常説法」「異類中行」と「ユニバーサル・プロジェクション(U.P.)について」『追手門経済論叢』37巻1, 2合併号, 2002年.

2002年11月11日 受理